

申命記をどのように適用すればよいか

福島 勲

申命記は神の人モーセの説教です。ただモーセのというのではなく、120歳になった預言者モーセの言葉です。そこには40年間の荒野の訓練を通過した者の学びがあります。創世記から民数記までの四書にまさるとも劣らない御言葉に満ち満ちています。主イエスは、この申命記から最も多くの御言葉を引用されました。世界中の多くの憲法はこの申命記をモデルにしたと言われます。

この書には天地万物の創造主、真の神に対する知識・経験があります。どのように神を礼拝し神に仕えるべきかが語られています。神の慈愛、聖さ、公正さ、人に対する思いやりを見ることが出来ます。

しかし、「申命記の主の命令とおきては素晴らしいが、私には手が届かない。飾っておくことは出来ても、私には実行するすべがない」と感じる人も多いのではないのでしょうか。どのように適用すればよいのでしょうか。

素晴らしい神の人・モーセ

まず、モーセという人について考えてみました。モーセはどういう人でしょう？

- ①モーセとは、「引き出す者」を意味します。彼は、イスラエルの民をエジプトから導き出した指導者であり、預言者です。
- ②レビ人の両親から生まれたが、エジプトの王パロによる男子の赤子殺害命令のため、ナイル川の葦の茂みに置かれた。すぐにパロの娘に拾い上げられ、王女の息子としてエジプトの最高の学問を身につけて成長した。
- ③40歳になった頃、同胞を奴隷の苦しみから救おうと志したが、同国人に受け入れられず、またパロの手を逃れて、ミデヤンの地に行った。そこで祭司の娘と結婚し、男の子を2人もうけた。
- ④80歳になった時、神はモーセをイスラエルの指導者として召し出された。
- ⑤神はモーセを通してエジプトに10の災害を与え、イスラエルの民をエジプトの苦役から救い出された。
- ⑥シナイ山で十戒を中心とする律法を神から受け、それをイスラエルの民に与えた。
- ⑦出エジプト後1-2年目にカデシュ・バルネアで民の指導者たちが犯した罪と、同調してつぶやいた悪い会衆の罪のため、民全体と共に荒野を40年間さまよう旅を余儀なくされた。
- ⑧メリバで罪を犯したため、ヨシュアとカレブを除くすべての成人男子とともに、約

東の地カナンに入ることが許されなかった。

⑨死を前にして、ヨシュアを後継者に任命し、120歳でモアブのネボ山で死んだ。

⑩「モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」(民数記12:3)

⑪自分を「しもべとして神の家全体のために忠実でした」(ヘブル3:5)

新約聖書においては、四福音書をはじめ、使徒の働き、ローマ書、コリント書、テモテ書、ヘブル書、ユダ書、黙示録、と88個所でモーセの名が出てきます。

もしモーセという人が存在しなかったとしたら、旧約聖書の根幹をなす最初の五冊(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)はなかったのです。付随する他の歴史書や預言書なども生まれなかったかもしれません。モーセを通して聖書が生まれたと言っても過言ではないでしょう。人をあまり高くあげるのは好みませんが、しかし、確かにモーセはそのような人物であったことは事実です。素晴らしい神の人・モーセです。

モーセの懇願の祈り

40年間の荒野の試練を終えて、120歳になったモーセは、約束の地・良き地カナンに入ることを心待ちにしていました。それは、これまでの苦勞すべて忘れることができるほどのことでしょう。モーセは、主に期待して祈りました。

「私は、そのとき、主に懇願して言った。『神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたはこのしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天、あるいは地にあるでしょうか。どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください。』」(3:23-25)

モーセは、主の力強い御手のわざがしもべである自分を通して示されたことを訴え、そのみわざの完結とも言える約束の地への入国を懇願したのです。それまでのモーセの業績を考えたら、主はその願いを受け入れてくださってもよいように思います。その懇願の祈りに対する答えはどうだったのでしょうか。

「しかし主は、あなたがたのために私を怒り、私の願いを聞き入れてくださらなかった。そして主は私に言われた。『もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言うてはならない。ピスガの頂に登って、目を上げて西、北、南、東を見よ。あなたのその目でよく見よ。あなたはこのヨルダンを渡ることができないからだ。……』」(3:26-27)

なんとということでしょう。残念ながらモーセの願いは聞き入れられませんでした。なぜでしょうか。神様はメリバでの問題を指摘されました。

モーセが約束の地に入れない理由

「ところが会衆のためには水がなかったので、彼らは集まってモーセとアロンとに逆らった。民はモーセと争って言った。

「ああ、私たちの兄弟たちが主の前で死んだとき、私たちも死んでいたのなら。なぜ、あなたがたは主の集會をこの荒野に引き入れて、私たちと、私たちの家畜をここで死なせようとするのか。なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから上らせて、この悪い所に引き入れたのか。ここは穀物も、いちじくも、ぶどうも、ざくろも育つような所ではない。そのうえ、飲み水さえない。」

モーセとアロンは集會の前から去り、会見の天幕の入口に行ってひれ伏した。すると主の栄光が彼らに現われた。主はモーセに告げて仰せられた。「杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。あなたは、彼らのために岩から水を出し、会衆とその家畜に飲ませよ。」そこでモーセは、主が彼に命じられたとおりに、主の前から杖を取った。

そしてモーセとアロンは岩の前に集會を召集して、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から私たちがあなたがたのために水を出さなければならないのか。」モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、たくさんの水がわき出たので、会衆もその家畜も飲んだ。

しかし、主はモーセとアロンに言われた。「あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集會を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない。」これがメリバの水、イスラエル人が主と争ったことによるもので、主がこれによってご自身を、聖なる者として示されたのである。」（民数記20:2-13）

モーセは岩を打つ必要はありませんでした。いや打つべきではなかったのです。ただ岩に命じるだけでよかったのです。主の御言葉は、「岩に命じれば、岩は水を出す。」と言われたのですから。岩を打つことは神の御言葉に対する不信です。なんと、二度までも打ってしまったのです。モーセは、「神様、ホレブの岩の時は、岩を打つように命じられたではありませんか」（出 17 章）と言うことができたとも考えられませんか。しかし、一度ならず、二度までも打っては弁解はできません。これは、モーセとアロンが主の言葉に背いて神の聖さを表わさなかったということです。

新しい世代は約束の地に入れる

反逆の民を 40 年間も忍耐深く導き続けた神の人モーセの、たった一度の衝動的な憤りから出た行為に対する神様の扱いは厳しすぎるように思われます。もとはと言えば

イスラエルの民が原因で起こったこと。たった一度の失敗だけで約束の地カナンに入れないとするのは、「神様、いささか厳しすぎるじゃありませんか」と言いたくなります。

「しかし、主は、あなたがたのことで私を怒り、私はヨルダンを渡れず、またあなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる良い地にはいることができないと誓われた。私は、この地で、死ななければならない。私はヨルダンを渡ることができない。しかしあなたがたは渡って、あの良い地を所有しようとしている。」(4:21-22)

ここで気になるのは、ヨシュアとカレブは別としても、反逆の民イスラエルの新しい世代は良い地に入れるということです。新しい世代の民とは言っても、本質的には変わっていない人々です。「私は、あなたの逆らいと、あなたがうなじのこわい者であることを知っている。」(申命記31:27)。そんな彼らが入れて、なんでモーセが入れないのでしょうか。なんて不合理な、と考えてしまいます。

二つの絵図

モーセを含め旧約時代の人・事物・出来事の一つ一つは新約時代の影であるとヘブル書の記者は語っています。

「**律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はない**」(ヘブル 10:1)

決してモーセが滅んでしまったと言うものではありません。彼は生きています(マタイ 17:3)。私が言いたいのは、神の御子キリストの登場によって、モーセの務めは終わるということです。これがヘブル書3章・4章であるとも言えるでしょう。

ここに、神から律法を受けて民に与えたモーセが約束の地に入れないという絵図を見ます。また主イエスの影であるヨシュアが新しい世代の民を約束の地に導き入れるという絵図を見ます。これら二つの絵図は何を意味するのでしょうか。

ここには新約の福音を見ることができるのではないのでしょうか。

「**律法はモーセによって与えられ、恵みとまこととはイエス・キリストによって実現した**」(ヨハネ 1:17)とあるからです。

律法の行ないによって義と認められる人はだれひとりいません(ガラテヤ 2:26)。行ないの立派さによって神の国に入れるという人は一人もおりません。たった一度の違反であっても違反者であることに違いはないのです。それが律法の罪定めです。

素晴らしい福音：罪人も神の国に入れる

「モーセのような立派な人は良い地に入れられるが、悪人はだめ！」と私は考えます。しかし、聖書はそう語っていないのです。主は、ニコデモに向かって語られました。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

… イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。…モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」(ヨハネ3:3-15)

イスラエルの指導者・ニコデモは素晴らしい人物です。しかし、主イエスは、ニコデモのような善良な人物であっても、そのままでは神の国には入れないと言われるのです。

また逆に、邪悪な反逆の民であれば神の国には絶対入れないというのでもありません。どんな罪人であっても、新しい世代によって代表される「新しく御霊によって生まれる」なら神の国に入れる、と主イエスは言われます。これは福音です。ここに福音の神髄があります。新約聖書はこれをトップニュースとして語っているのです。特にパウロは声を大にして叫んでいるのです。

これこそ見逃してはならない福音です。イスラエルの民同様、生まれながらどうしようもない心の持ち主である私でも神の国に入れていただけるというのです。

なぜ入れていただけるのでしょうか。キリストが私のような者のためにも死んでくださったからです。いのちを与えるために復活されたからです。聖霊によって新しいいのちが信じる私に与えられたからです。神の国は 100 %新しいいのちの問題です。古い命は全く通用しません。

幼いながらも、新しいいのちを得た私の歩みも、いのちの御霊によります(ローマ8:2-4)。古い命を奮起させて、自力で、律法に従おうとする道ではありません。新しいいのちによって律法を全うさせていただくのです。なんと素晴らしい福音でしょう。